

フランスの 古城

Vieux Château
de la France



ロワール渓谷に点在する王侯貴族の離宮となった華麗な古城
アルビジョワ十字軍に破壊された忘却の廃城
古代ローマの時代に源流を持つ城塞都市カルカソンヌ
多彩なフランスのお城を網羅



EDING
CORPORATION

北フランスの古城

North France



コンピエーニュの森に建つシャンティイ城。内部はフランス屈指のコンデ美術館となっている。

ベルギーや
ルクセンブルクに接し、
イギリス海峡を挟んで
イギリスとも向かい合う
フランス北部。

パリ近郊をはじめ、
さまざまな歴史の
舞台となってきた
このエリアには、
近代的な街が多い一方で、
フランスの歴史を
見届けてきた
重要な古城も
多く点在している。

North France Map



01 ガイヤール城



02 ヴォー・ル・ヴィコント城



03 カーン城



04 ピエールフォン城



05 シャンティイ城



06 コンピエーニュ城



07 ヴァンセンヌ城



08 オークニクスブル城



09 サン・ジェルマン・アン・レー城



10 マルメゾン城



11 フージェール城

02 ヴォー・ル・ヴィコント城

Château de Vaux-le-Vicomte



MAP



ヴォー・ル・ヴィコント城の南側ファサード。ドーム型の屋根が印象的な城館は、上品で華やかな趣をたたえている。

ヴェルサイユ宮殿のモデルとなった城

パリの東方約50kmに建つヴォー・ル・ヴィコント城は、いち貴族の住まいながらも豪華絢爛なたたずまいで、ヴェルサイユ宮殿のモデルにもなった城だ。現在は、ヴォギュエ伯爵一家が城主を務めている。

ルイ十四世が嫉妬した 財務長官の豪邸

かつて、イル・ド・フランス（パリを中心とした地域圏）の東半分を占めていたという現在のセーヌ・エ・マルヌ県には、華やかなたずまいで圧倒的な存在感を放つヴォー・ル・ヴィコント城がある。

城の着工は一六五六年、ルイ十四世の財務長官を務めていたニコラ・フーケの指揮による。当時「最高の芸術家」と称されていた建築家ル・ヴォー、造園家ル・ノートル、室内装飾画家シャルル・ブランが築城を担い、ヴェルサイユ宮殿をはじめその後の宮殿建築に多大な影響を与える城が完成した。しかし、一六六一年に王侯貴族を招待して

城の落成式を行ったフーケは、ルイ十四世の不興を買って国家財産横領罪で投獄され、その生涯を終えることとなった。

敷地内には、ノートルが造園した幾何学模様の庭園が整備され、緑豊かな植物や色鮮やかな花々を目にすることが出来る。また、城内には当時のままの調度品や絵画が残されており、ルイ十四世の嫉妬にも納得してしまうほどの絢爛たる空間が広がっている。

COLUMN

華やかなヴォー・ル・ヴィコント城のなかでも特に観光客を楽しませているのが、5～10月の期間限定で開催されるキャンデルナイトだ。2000本ものキャンデルが照らし出す夜の城は、昼間とはまた異なる美しさをまとう。加えて、クラシック音楽と共にかつて行われた落成式でのうたげを再現するなど、特別な一夜を演出している。



【右】ル・ノートルが手がけた幾何学模様の庭園。城館の華やかさと調和した見事なデザインだ。【左上】庭園内に鎮座する2匹のメスライオンの石像。今にも動き出しそうなほど生き生きとしている。【左下】城へと続く門にも細やかな装飾が施されている。

05 | シャンティイ城

Château de Chantilly



MAP

シャンティイ城
☆
パリ

France

ルネサンス様式で創建された美しいシャンティイ城。たっぷりの水をたたえた堀に囲まれている。

フランス屈指の美術館を擁する古城

パリ盆地のシャンティイ市に建つシャンティイ城。城内には国内屈指のコレクションを誇るコンデ美術館があり、歴代城主が収集した芸術品を見学できる。なお、1989年には姫路城と姉妹協定が結ばれた。

01 | シュリー・シュル・ロワール城

Château de Sully-sur-Loire



MAP



シュリー・シュル・ロワール城の外観。夕暮れにはよりロマンチックな雰囲気を味わえる。

渓谷の最東端に建つシュリー公爵の居城

ロワール渓谷一帯の最東端に位置するシュリー・シュル・ロワール城は、街全体を要塞化するために建物が直接掘の中に築かれている。1928年には国の歴史的建造物に指定された。

交通の要衝に建つ 堀の中に築かれた城

ロワール渓谷東部の街、シュリー・シュル・ロワールは、三つの陸路と一つの水路が交わり、ロワール川を渡ることができない数少ない場所の一つだ。そんな街を統治するために築かれたのが、ロワール川のほとりに建つシュリー・シュル・ロワール城である。堀の中に直接築かれた城館には、象徴的な円錐型屋根の塔や重量感のある天守などが備えられ、厳かな雰囲気たたえている。築城時期については判明しておらず、この地に確実に城があったとされるのは、一〇〇〇年頃にさかのぼる。

一六世紀には、ブルボン朝初代のフランス国王アンリ四

世に仕えていたマクシミリアン・ド・ベテヌヌが城を購入し、約四世紀の間シュリー公爵の居城として使用した。内部には、現在もシュリー公と公爵夫人の墓所があり、一族の歴史をしのぶことができる。一九六二年、シュリー・シュル・ロワール城はシュリー公の手を離れ、ロワレ県の所有となった。以降、幾度もの修復工事が行われ、現在は一般公開されている。

COLUMN

ロワール渓谷において、世界遺産エリアへの玄関口にあたるシュリー・シュル・ロワール。古代ローマ時代から続く長い歴史を持ち、現在はさまざまなイベントが開催されて街全体が活気にあふれている。また、街の北部に広がるオルレアン森は、ハイキングや乗馬、狩猟など豊富なアクティビティが楽しめるあって、観光客にも大人気だ。



【右】堀に架かる橋と城。【左上】正面から望むシュリー・シュル・ロワール城。【左下】たっぷりの水が張られた堀の中に直接築かれている。

16 | ムーラン城

Château du Moulin



MAP



ピンク色の外壁が印象的なムーラン城の外観。その周囲は堀と豊かな緑に囲まれている。

イチゴの香りが漂うピンク色の小さな城

シンプルなれんが造りの外観が美しいムーラン城は、15～16世紀にかけて創建された。現在、敷地内ではイチゴが栽培されており、イチゴ栽培に関する文化的背景や歴史などが紹介されている。



【右】白いレンガの縁取りがかわいらしい。【左上】堀の対岸からムーラン城を望む。【左下】庭園内に建つ庭師の家。城館同様、こちらもおとぎ話のような雰囲気をもたえている。

一五世紀の古城を利用した イチゴの博物館

フランス中西部に位置する小さな村、ラセールシュールクロズヌ。その穏やかな田園地帯にたたずむのがムーラン城だ。小さく、特に華やかな装飾も施されていない城だが、ピンク色のれんがに彩られた外観は、まるで物語に出てきそうなかわいらしさだ。

この城は一五世紀後半、最

COLUMN

日本と同じく、フランスのイチゴも春～初夏にかけてが旬。なかでも代表格といえるのが、やや小ぶりで縦長の形が特徴的なガリゲットという品種だ。香りの高さや強い甘みがおいしく、フランス国内でも随一の人気を誇る。なお、フランスでは、イチゴを食べる際にたっぷりのホイップクリームを載せて食べるのが定番だ。

初の城主であるフィリップ・ムーランの邸宅として建てられた。彼は、第一次イタリア戦争で当時のフランス王シャルル八世の命を救ったことで知られる人物だ。城の周囲はぐらりと堀に囲まれており、創建当初はさらにその周りに城壁が存在していたという。

現在、ムーラン城は四〇種以上のイチゴを栽培していることでも知られており、城内はフランスにおけるイチゴ栽培の歴史や生産技術の進化について展示する博物館となっている。また、このほかに、さまざまなイベントや結婚式の開催に加えて、子どもたちの修学旅行のために特別スケジュールを設定するなど、地域の人々に寄り添った運営が行われている。

04 | ペルペルテューズ城

Château de Peyrepertuse



MAP



ペルペルテューズ城の全景。現在のはれんが造りの城壁が残るのみ。

断崖絶壁の岩山に建つカタリ派最後の要塞

断崖絶壁の岩山の頂に建つペルペルテューズ城は、カタリ派というキリスト教の一派が築いた城塞跡だ。現在、建物は廃墟となっているものの、石造りの城壁の大部分は良好な保存状態が保たれている。

悲しきカタリ派の遺構

カルカソンヌの南方約八〇キロに位置し、緑深い山々に囲まれたのどかな村、デュイアック＝ス＝ペルペルテューズ。

その山の標高約八〇〇メートルには、長大な城壁を残すペルペルテューズ城が建つ。

この城は、カトリック教徒から迫害を受けたカタリ派の人々が、身を守るために築いた一三世紀の要塞である。カタリ派とは、一二〜一三世紀に興隆したキリスト教の一派で、フランス南部やイタリア北部を中心に活動していた。特に、カルカソンヌをはじめとするピレネー山脈近郊の地域は「ペイ・ド・カタール（カタリ派の国）」と呼ばれ、大勢のカタリ派が暮らしたという。

しかし一三世紀以降、カタリ派はルイ九世により弾圧され、ペルペルテューズ城も陥落してしまった。

その後、城は王家の要塞として使用されたが、ピレネー条約が締結すると戦略的役割を失い、フランス革命時にはついに放棄された。一八二〇年からは国有財産として保存され、現在ではカタリ派最後の要塞として、毎年一〇万人もの観光客が訪れている。

COLUMN

豊かな自然に囲まれているデュイアック＝ス＝ペルペルテューズは、南フランスの田舎町の風情を体感できる村。周囲には穏やかな牧草地が広がっており、牛たちがのんびりと草をはむ様子を目にすることができる。岩山の上に建つペルペルテューズ城は、そんな街並みを一望できるとあって、観光客に人気の絶景スポットとなっている。



【右】岩山の頂にそびえるペルペルテューズ城。下から見上げるとその陰しさがよく分かる。【左上】城の内部。崩れかけた石壁が、城が歩んだ歴史を物語っている。【左下】のんびりと草をはむ牛たち。デュイアック＝ス＝ペルペルテューズには、このような牧歌的な光景が広がっている。

03 | グラン・ビガール城 (ベルギー)

Kasteel van Groot-Bijgaarden



MAP



色鮮やかなチューリップを眺めながら、グラン・ビガール城への入り口をくぐる。

500種以上の花々が咲き誇る城

ベルギー北西部の村、グラン・ビガールに建つグラン・ビガール城。春には国内最大のフラワー・ショーが開催されるとあって、観光客だけでなく地元の人々も多く訪れる。

花のじゅうたんが広がる 春の庭園は必見

グラン・ビガール城は、首都ブリュッセルの北西約八キロに位置するグラン・ビガールという村に建つ古城である。正式名称を「グロート・バイハールデン城」といい、毎年「ブリュッセル・フロラリア」というフラワー・ショーの会場として使用されている。

起源となる城が創建されたのは一二世紀のこと。それから約五〇〇年後の一七三一年には、当時の城主バイハールデン侯爵のヘレナ夫人が、造園家のF・J・ドロンスに当時流行していたフランス式庭園を造らせ、グラン・ビガール城最大の特徴ともいえる庭園が誕生した。さらに一九〇

二年には、ベルギー国王レオポルド二世に仕えて数多くの公園を整備したという造園建築家ルイ・フックスが、庭園の一部をイギリス風に造り変えて現在の姿が完成した。

これまで貴族たちの居城として使用されてきたグラン・ビガール城だが、敷地内には城館だけでなく主塔や礼拝堂なども備えられており、フラワー・ショーの期間中のみ見学することができる。

COLUMN

毎年4～5月の1カ月間のみ開催される「ブリュッセル・フロラリア」。約14ヘクタールに及ぶ広大な庭園内には、チューリップやスイセン、ヒヤシンス、ユリなど、500種以上の花が咲き誇り、目を見張るようなカラフルな景観を織り成している。ちなみに、城の一般公開はこのフラワー・ショー開催期間中のみなので、見逃さないように注意したい。



【右】城内で咲き誇る、ピンク色が鮮やかなチューリップ。【左上】中世の趣を今に残すグラン・ビガール城(写真: Vera Kalyuzhnaya / Shutterstock.com)。【左下】カラフルな花のじゅうたんが広がるグラン・ビガール城の庭園(写真: Vera Kalyuzhnaya / Shutterstock.com)。

09 | ホーエンツォレルン城 (ドイツ)

Hohenzollern Castle



雲海に囲まれて、まるで空に浮いているかのような神秘的な姿を見せるホーエンツォレルン城。

雲海のなかにそびえるドイツ三大名城の1つ

ドイツ南西部のバーデン・ヴュルテンベルク州に建つホーエンツォレルン城は、ドイツ屈指の名門ホーエンツォレルン家に由来する城だ。美しい古城が多いドイツのなかでも、三大名城の1つに数えられている。



【右】敷地内には、プロイセン王国の紋章に用いられるワシを描いた看板が立てられている。【左上】華やかなシャンデリアや大理石の列柱が並ぶ「伯爵の大広間」。【左下】城の周囲に並ぶ、歴代皇帝の銅像。

COLUMN

華やかな空間が広がるホーエンツォレルン城の内部。なかでも、王妃の部屋として使用されていた「青のサロン」は見どころの一つとして有名で、青で統一された調度品や金の格間(ごうま)天井、象嵌(ぞうがん)細工の床などを目にすることができる。ほかにも「系図の部屋」や「伯爵の大広間」などさまざまな部屋があり、城の歴史を感じることができる。

ドイツ史に欠かせない名城
標高約九〇〇メートルのシユヴァーベン山の頂上には、おとぎ話に登場する城そのものの雰囲気をたたえた、ホーエンツォレルン城が建つ。現在の建物は一八六七年に再建されたものだが、気品あふれる華麗な姿を誇っており、時折見せる雲海に囲まれて空に浮かんでいるかのような幻想的な姿は、まさに絶景だ。

城が建てられたのは一世紀。後にプロイセン王国を建国してドイツ皇帝やルーマニア国王を輩出する名家、ホーエンツォレルン家の居城として築城された。以降、数々の戦火をくぐり抜けてきたものの、一四二三年には完全に破壊されてしまう。その後すぐに再建され、三十年戦争の際には要塞としても利用されが、ウエストファリア条約による講和後は城の重要性が薄れ、衰退の一途を辿っていった。

その後、廃墟となった祖先の城を目にしたプロイセン国王フリードリヒ・ヴィルヘルム四世が、ネオ・ゴシック様式の城として一九世紀に再建。現在もドイツ最後の皇帝であるヴィルヘルム二世の直系の子孫が城主を務めている。

10 | アウグストゥスブルク城 (ドイツ)

Augustusburg Castle



MAP

アウグストゥスブルク城



Germany

France

美しく整備された庭園と、その向こうに建つアウグストゥスブルク城。

ドイツにおけるロココ建築の先駆け

ドイツ西部のライン川沿岸に建つアウグストゥスブルク城。華麗なロココ様式で築かれているこの城は、「ブリュールのアウグストゥスブルク城と別邸ファルケンルスト」として1984年に世界遺産に登録された。

フランスの古城

2015年5月10日 version1.1発行

ISBN978-4-902896-09-1

著作	株式会社 エディング
編集	小出彩奈・谷 伸子・小島優貴
デザイン	小出彩奈
写真	Shutterstock ONLYIMAGE
発行人	武井誠
発行	株式会社 エディング 〒162-0811 東京都新宿区水道町2-14 柴木ビル2F

【お問い合わせ】 eding@eding.co.jp

©Eding Corporation 2015

本書の無断転載、複製、頒布、公衆送信、翻訳、翻案等を禁じます。

一部または全部をアナログ化することは、個人や家庭内の利用でも著作権法により認められておりません。

エディングの書籍についての新刊情報・詳細情報は、以下をご覧ください。

<http://www.eding.co.jp/>